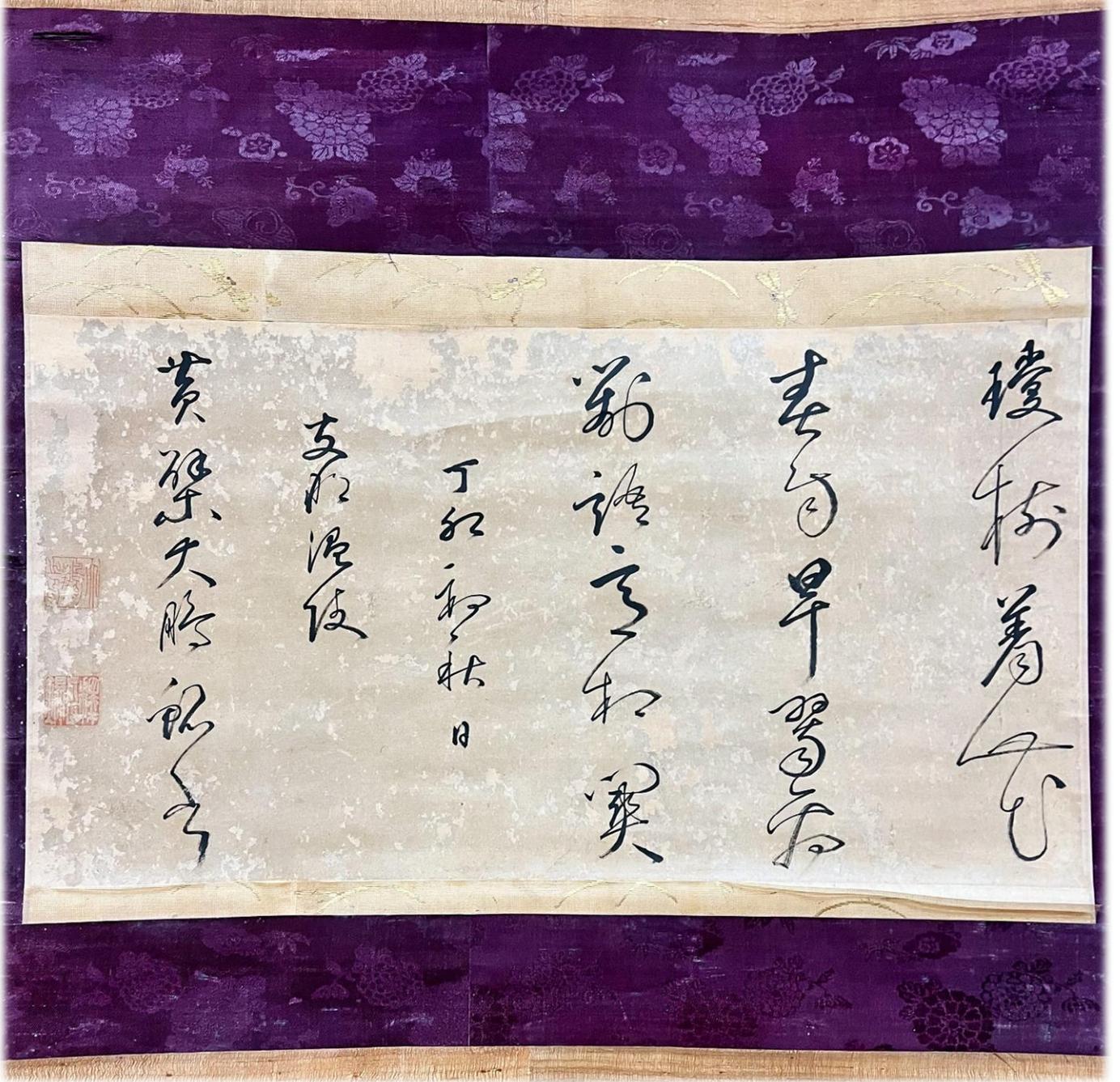




# 顛飽袋 764



写真：大鵬和尚筆の掛け軸 恩林寺蔵

お寺へ行こう 和尚さんと友だちになろう



中山かんのん  華岳山 恩林寺

中山中学校下

☎506-0052 岐阜県高山市下岡本町2779

✉kagakuzan@onrinji.com ☎(0577)34-1245



<https://onrinji.com/>

## 大鵬和尚の驚き

明和の頃（1760年代頃）中国より来朝され黄檗山萬福寺の住職となられた大鵬和尚は池大雅いけのたいがを呼んで東方丈（書院）に中国西湖の風景を描かせました。

大雅はもちろん西湖など見たこともありません。和尚の話を書きながら構想を練ったと思われまます。上方に峰一つを描き足すのを見て驚き「この山は飛来峰と  
いうのです。私はあの国に生まれ、あの峰辺りで昔はよく遊んだものです。」

しかしこの国の人はどうして話だけでこのような作品ができるのか？と大変驚き、またお褒めになつたといわれております

（この西湖図は現在、掛け軸に表装され萬福寺に保存されております。）

その後、池大雅は、五百羅漢の大作を描き（これは京都国立博物館に寄託）他にもたくさん作品を残しております。これも大鵬和尚と大雅さんとのご縁というものでしょう。

数年前、飛騨市のある方から「このお方は黄檗の和尚さんのお筆ではありませんか、よろしかったらお寺で残してくれませんか。」との申し出に有難くご寄贈いただきました。

和尚さんの  
豆知識



黄檗山を二度にわたり導いた

第15代・18代住持、大鵬正鯤たいほうしょうこん。

竹画の名手として「竹の大鵬、梅の紫石」と並び称されたその筆致は、清廉で迷いがありません。風に吹かれてもしなやかに折れない竹の如きその生き様は、混乱の時代に二度も山を託されるほどの深い信頼を集め、今も黄檗の地に気高い香りを遺しています。

## 昭和の和尚、下岡本を語る

昭和二十年代末から三十年代初めにかけて郊外も西のほうが目目されだしたのか、まず老人施設の向陽園ができました。

小高く盛り土した上に何棟もの建物が並び、景観が一新しました。職員の方々も私達近隣にも仲良くしていただきました。

園長先生は称讚寺の住職伊達正夫先生でした。

いつもニコニコ気さくな先生で玄関正面には『温故知新』と大きな字が書いてあり「先生、これなんて書いてあるの？どういう意味？」

「これはな、昔のお偉い人の言葉でな、岐阜県の武藤嘉門という方の書かれたものや。あんたも大きくなるとわかるようになるでな…。」なるほど近年ようやく少し意味が分かるような気がいたします。

古きを温め、新しきを

知る…か。



向陽園ができる  
と間もなくCBC高山放送局が  
開局します。

私ら四年三組は学校で始めて器  
楽部ができ、開局記念、特別出

演で、荒城の月、クシコスポストを演奏してきました。アナウンサーのお姉さんは美人でおちやめな人でした。

みんなで近くの坂で竹スキーをして遊びました。スタジオの近くには鉄塔が立ち赤い電気がともりました。まさに下岡本の夜明けです。ちなみにこの時のスタジオが七十年後の今も健在です。



住職合掌



華岳山 忍林寺

住職 古田 正彦

新堂 小森 鳳雅



## 【第五章 二節】殿司

早朝、静寂を破る巡照板の音が、雲水たちの眠りを解きます。

その直後、暗闇に包まれていた本堂や回廊に、ぽつと温かな灯りが灯ります。

それは、殿司でんすの手によって、お寺に命が吹き込まれる瞬間です。そして太鼓の音が響く中、本堂の掃除を始めます。本尊や経机の埃を丁寧に払い、冷たい石畳を一点の曇りもなく拭き上げ、経本を整然と並べる。座布団の向き、そして総ふさのひとすじに至るまで、指先で美しく整えていきます。

朝課10分前。静かに蠟燭へ火を灯し、線香を立てる。

法要の準備や諸堂の管理が殿司の役割なのです。

法要の準備から諸堂の管理まで、すべてを司る殿司の仕事は、一見すると朝晩だけのものに見えるかもしれませんが。しかし、その実は、絶え間ない気づきの連続です。蠟燭は短くなっていないか？

線香は足りているか？

回廊に塵ひとつ落ちていないか？

供えられたビシヤの葉に、枯れはないか？一つでも見落としがあれば、お参りされる方の心を曇らせてしまう…その一心で、殿司

は一日中、広大な境内を巡り続けます。

役目を終えようとする短い蠟燭も、決して捨てることはありません。禅堂へと持ち帰り、坐禅を組む修行僧の元で再び命を宿します。燃え残った線香は御香へと姿を変え、枯れたビシヤは山へと返し、次なる命を育む肥沃な土へと還していく。何ひとつ、無駄なものなどない…その精神が、お寺の隅々にまで浸透しています。

一日の終わり、諸堂の戸締まり

と消灯を確認し、殿司の長い

一日は静かに幕を閉じます。

目立たぬ場所での、日々の愚直なまでの確認と精進。

その積み重ねこそが、訪れる人の心を洗う、清らかな聖域を支えているのです。